鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 19

一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 XXI

鳥取県東伯郡琴浦町

UME DA KAYA UNE

# 梅田萱峯遺跡Ⅲ

2007

鳥取県埋蔵文化財センター
国土交通省　倉吉河川国道事務所

鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 19

一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 XXI

鳥取県東伯郡琴浦町

UME DA KAYA UNE

# 梅田萱峯遺跡Ⅲ

2007

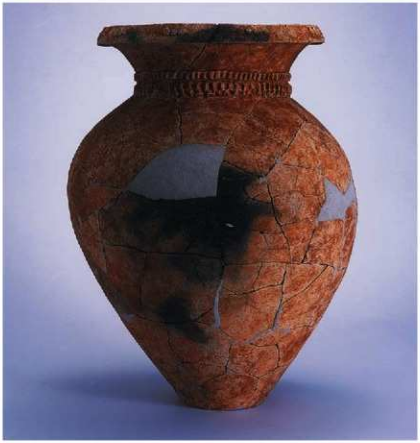
鳥取県埋蔵文化財センター
国土交通省　倉吉河川国道事務所

1．遺跡遠景（南西から）

2．遺跡近景（東から）

巻頭図版２

１．SX16検出状況（南から）



２．SX16出土土器

# 序

一般国道９号東伯中山道路の改築に伴う発掘調査は、平成１４年度から行われ、平成１８年度末時点で遺跡数は２３遺跡に及んでいます。

そのうち、琴浦町にある梅田萱峯遺跡では、弥生時代の集落跡など、この地域の歴史を解明するための貴重な資料を確認することができました。遺跡の営まれた丘陵上には住居跡や墓などが残され、弥生時代のムラの景観を思い浮かべることができます。

埋蔵文化財センターでは発掘調査により明らかとなった遺跡や出土品を活用し、その普及啓発に努めることも重要な業務としております。

梅田萱峯遺跡の出土品についても、地域の歴史を語る資料として今後、活用を図りたいと考えています。

本書はその調査成果を報告書としてまとめたものです。この報告書が、郷土の歴史を解き明かす一助となり、埋蔵文化財が郷土の誇りとなることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成１９年１２月

鳥取県埋蔵文化財センター

所長　久保 穣二朗

# 序　文

一般国道９号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約６９１ｋｍの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取―島根県境）までの９２．３kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡琴浦町から西伯郡大山町にかけての、国道９号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された一般国道９号のバイパス（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第94条の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成１８年度は、「梅田萱峯遺跡」、「箆津乳母ヶ谷第２遺跡」、「笠見第３遺跡」の３遺跡について鳥取県教育委員会と発掘調査の委託契約を締結し、鳥取県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「梅田萱峯遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた鳥取県教育委員会の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成１９年１２月

国土交通省　倉吉河川国道事務所

所　長　　飛田　敏行

# 例　言

1．本報告書は、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道９号(東伯中山道路)の改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成18年度に行った梅田萱峯遺跡２区の発掘調査報告書である。

2．本報告書に収載した遺跡の所在地及び調査面積は以下のとおりである。
梅田萱峯遺跡２区：東伯郡琴浦町大字梅田字後谷３９５－５外　　調査面積 1,000㎡

3．本報告書で示す標高は、３級基準点H10－３－16(X：－53986.046、Y：－66601.614)を基準とする標高値を使用した。方位は公共座標北を示す。なお、X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅴ系の座標値である。

4．本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「赤碕」「伯耆浦安」、琴浦町(旧赤碕町)発行の「赤碕町都市計画図１」を使用した。

5．本報告にあたり調査前地形測量・基準点測量、調査後地形測量、調査後航空写真撮影、出土炭化材の年代測定・樹種同定を業者委託した。

6．本報告書に掲載した遺構・遺物実測図の作成は、埋蔵文化財センター及び埋蔵文化財センター調査第一係(東伯調査事務所)で行い、調査担当者が作成したものを調査員及び整理作業員が浄書した。

7．本報告書で使用した遺構・遺物写真は調査担当者が撮影した。

8．本報告書の執筆は、小口英一郎、恩田智則、濵本利幸の協議に基づいて行い、小口が編集した。文責は目次に記している。

9．発掘調査によって作成された図面・写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

10. 現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の機関に御指導・御協力いただいた。記して深謝します。(敬称略)
琴浦町教育委員会

# 凡　例

1．遺物の註記における遺跡名は、「ウメ２」を略号とし、合わせて「遺構名、遺物番号、日付」を記入した。

2．本報告書で用いた遺構の略号は以下のとおりである。
SI：竪穴住居(建物)跡　SS：段状遺構　SB：掘立柱建物跡　SK：土坑　SX：土器棺墓
P：柱穴・ピット

3．本報告書で用いた遺物の略号は以下のとおりである。
S：石器
記号のないものは土器・土製品・焼成粘土塊

4．挿図、遺構・遺物にはそれぞれ通し番号を付け、本文中、挿図中及び写真図版の遺物番号は一致する。なお、遺構名称は平成17・18年度調査区(１区)から通し番号を付している。

5．遺構図・遺物実測図の縮尺については、特に説明のない限り以下のとおりである。
竪穴住居跡・段状遺構・掘立柱建物跡：1/60　土坑：1/20、1/40　柱穴・ピット：1/40
土器：1/4　石器・石製品：2/3、1/2、1/4

6．遺構図･遺物図に用いたスクリーントーン及び記号は､特に説明のない限り以下のとおりである。
また、遺物実測図の断面は須恵器を黒塗りとし、それ以外のものは白抜きで示した。
地山・赤彩土器　貼床・石器磨り面　焼土・焼土面　炭化物層
●：土器・土製品・焼成粘土塊　□：石器

7．ピットの計測値は(長径×短径－深さ)で示している。

8．遺物観察表は遺構単位で章末に掲載し、土器についての法量は基本的に口径、器高を掲載した。
すべての遺物に対して、復元したものは※印、残存値は△印を数値の前に付している。

9．発掘調査時における遺構名・番号と報告書記載時の遺構名・番号を、一部について変更したものがある。新旧の対照表は４頁に示した。

10．本報告における遺構・遺物の年代観は以下の文献を参照とした。
清水 真一　1992 「因幡・伯耆地域」正岡睦夫・松本岩雄 編『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』 木耳社

# 目　次

序
序文
例言
凡例

第１章　調査の経緯
第１節　調査に至る経緯……（小口）1
第２節　調査の方法と経過……（小口）2
第３節　調査体制……（小口）4

第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境……（湯村）5
第２節　歴史的環境……（湯村）5

第３章　調査の成果
第１節　遺跡の立地と層序……（小口）9
第２節　調査の成果……（小口）11
（１）概要……11
（２）竪穴住居跡……13
（３）段状遺構……20
（４）掘立柱建物跡……24
（５）土坑……24
（６）土器棺墓……44
（７）ピット……46
（８）遺構外出土遺物……53

第４章　自然科学分析の成果
第１節　梅田萱峯遺跡２区出土炭化材樹種同定……（株式会社　古環境研究所）62
第２節　梅田萱峯遺跡２区出土炭化材放射性炭素年代測定……（株式会社　古環境研究所）64

第５章　総括……（小口・恩田・濱本）66

写真図版
報告書抄録

# 挿図目次


第１図　東伯中山道路ルートと関係遺跡位置図……1
第２図　調査地位置図……2
第３図　遺跡位置図……5
第４図　周辺遺跡分布図……7
第５図　調査前地形測量図……9
第６図　遺構配置図……10
第７図　基本層序……12
第８図　SI12(1)……13
第９図　SI12(2)……14
第10図　SI12出土遺物……15
第11図　SI13(1)……16
第12図　SI13(2)……17
第13図　SI13出土遺物(1)……18
第14図　SI13出土遺物(2)……19
第15図　SI14……21
第16図　SI14出土遺物……21
第17図　SS4……22
第18図　SS4出土遺物……23
第19図　SB1……25
第20図　SB2……25
第21図　SK61……26
第22図　SK62……27
第23図　SK62出土遺物……28
第24図　SK63……29
第25図　SK63出土遺物……30
第26図　SK64……31
第27図　SK64出土遺物……31
第28図　SK65……32
第29図　SK65出土遺物……33
第30図　SK66……35
第31図　SK66出土遺物(1)……35
第32図　SK66出土遺物(2)……36
第33図　SK67……37
第34図　SK67出土遺物……37
第35図　SK68……37
第36図　SK68出土遺物……37
第37図　SK69……38
第38図　SK69出土遺物……38
第39図　SK70……39
第40図　SK70出土遺物……40
第41図　SK71……41
第42図　SK71出土遺物……41
第43図　SK72……42
第44図　SK73……42
第45図　SK72出土遺物……43
第46図　SX16……45
第47図　SX16出土遺物……46
第48図　P154……47
第49図　P154出土遺物……47
第50図　ピット(1)……48
第51図　ピット(2)……49
第52図　ピット(3)……50
第53図　P186出土遺物……50
第54図　P172出土遺物……50
第55図　遺構外遺物分布図……51
第56図　遺構外出土遺物(1)……52
第57図　遺構外出土遺物(2)……53
第58図　遺構外出土遺物(3)……54
第59図　遺構外出土遺物(4)……55


# 挿表目次


表１　東伯中山道路関係の調査一覧……2
表２　新旧遺構名対照表……4
表３　ピット計測表……56
表４　梅田萱峯遺跡2区出土土器観察表(1)…56
表５　梅田萱峯遺跡2区出土土器観察表(2)…57
表６　梅田萱峯遺跡2区出土土器観察表(3)…58
表７　梅田萱峯遺跡2区出土土器観察表(4)…59
表８　梅田萱峯遺跡2区出土土器観察表(5)…60

表９　梅田萱峯遺跡2区出土土製品・焼成粘土塊観察表 ……60
表10　梅田萱峯遺跡2区出土石器観察表(1) …60
表11　梅田萱峯遺跡2区出土石器観察表(2) …61
表12　梅田萱峯遺跡2区における樹種同定結果 …63
表13　試料と方法……64
表14　測定結果……64

## 文中写真目次

写真１　遺構完掘状況……11
写真２　調査区全景(西から)……11
写真３　梅田萱峯遺跡2区出土炭化材 ……63

## 図版目次

巻頭図版１　１．遺跡遠景(南西から)
２．遺跡近景(東から)
巻頭図版２　１．SX16検出状況(南から)
２．SX16出土土器
PL.1　１．遺跡遠景(北から)
２．２区完掘状況近景(北から)
PL.2　１．SI12完掘状況(西から)
２．SI12遺物出土状況(西から)
PL.3　１．SI12土層断面(南西から)
２．SI12土層断面(東から)
３．SI12-P1完掘状況(北から)
４．SI12遺物出土状況(北西から)
５．SI13完掘状況(西から)
PL.4　１．SI13遺物出土状況(西から)
２．SI13土層断面(南東から)
３．SI13土層断面(北西から)
４．SI13-P1完掘状況(南から)
５．SI13-P1土層断面(南東から)
PL.5　１．SI13-P2完掘状況(南から)
２．SI13-P3完掘状況(南から)
３．SI13-P4完掘状況(南から)
４．SI13-P5完掘状況(南から)
５．SI13-P7完掘状況(西から)
６．SI13-P10完掘状況(北から)
７．SI13-P16完掘状況(東から)
８．SI13調査風景(北西から)
PL.6　１．SI14完掘状況(北から)
２．SI14遺物出土状況(北から)
３．SI14土層断面(東から)
４．SI14土層断面(北から)
５．SI14-P1完掘状況(北西から)
PL.7　１．SS4完掘状況(南から)
２．SS4遺物出土状況(1)(南から)
PL.8　１．SS4遺物出土状況(2)(南から)
２．SS4遺物出土状況(3)(北から)
PL.9　１．SS4土層断面(東から)
２．SB1完掘状況(南から)
３．SB2完掘状況(南西から)
PL.10　１．SK61検出状況(西から)
２．SK61炭化材出土状況(西から)
３．SK61土層断面(南西から)
４．SK61土層断面(北東から)
５．SK61完掘状況(南西から)
６．２区調査風景(南東から)
PL.11　１．SK62完掘状況(東から)
２．SK62遺物出土状況(東から)
PL.12　１．SK62検出状況(南から)
２．SK62土層断面(南東から)
３．SI12調査風景(南から)
４．SK63完掘状況(西から)
PL.13　１．SK63遺物出土状況(西から)
２．SK63土層断面(北から)
３．SK64完掘状況(北東から)
４．SK64集石出土状況(南から)
５．SK64土層断面(南西から)
PL.14　１．SK65完掘状況(東から)
２．SK65土層断面(東から)
３．SK65遺物出土状況(1)(南西から)

4．SK65遺物出土状況(2)(東から)
5．SK66完掘状況(北から)
6．SK66土層断面(北から)
PL.15 1．SK66遺物出土状況(1)(南から)
2．SK66遺物出土状況(2)(北から)
3．SK67土層断面(南から)
4．SK68完掘状況(北から)
5．SK68土層断面(北から)
6．SK68遺物出土状況(北から)
PL.16 1．SK69完掘状況(北から)
2．SK69土層断面(南東から)
3．SK69土層断面(北西から)
4．SK69遺物出土状況(北東から)
5．SK70完掘状況(南東から)
6．SK70土層断面(南東から)
PL.17 1．SK70遺物出土状況(1)(北東から)
2．SK70遺物出土状況(2)(南東から)
PL.18 1．SK71完掘状況(西から)
2．SK71遺物出土状況(西から)
PL.19 1．SK71遺物出土状況(北から)
2．SK71土層断面(南西から)
3．SK72完掘状況(西から)
4．SK72土層断面(南から)
5．SK73完掘状況(西から)
6．SK73検出状況(東から)
PL.20 1．包含層遺物出土状況(南から)
2．SX16完掘状況(北から)
PL.21 1．SX16検出状況(1)(東から)
2．SX16検出状況(2)(北東から)
3．SX16遺物出土状況(1)(北東から)
4．SX16遺物出土状況(2)(東から)
5．SX16土層断面(北西から)
6．SX16土層断面(北東から)
PL.22 1．P154完掘状況(南から)
2．P154土層断面(北西から)
3．谷部遺物出土状況(南西から)
4．2区表土剥ぎ風景(南から)
5．G15グリッド礫群出土状況(西から)
PL.23 1．西側谷部土層断面(東から)
2．SI12・14出土土器・土製品
PL.24 SI13出土土器
PL.25 SS4出土土器
PL.26 SK62出土土器・焼成粘土塊
PL.27 SK63出土土器
PL.28 SK65出土土器(1)
PL.29 SK65出土土器(2)
PL.30 SK66出土土器(1)
PL.31 1．SK66出土土器(2)
2．SK64出土土器
PL.32 1．SK67・68・69・71・遺構外出土土器(1)
2．SK70出土土器
PL.33 SK72出土土器・土製品
PL.34 1．SI12・13・P154・遺構外出土土器(2)
2．P154・186出土土器
PL.35 1．SI12出土土器
2．SI13出土土器(1)
3．SI13出土土器(2)
PL.36 遺構外出土土器(3)
PL.37 遺構外出土土器(4)
PL.38 1．遺構外出土土器(5)
2．剥片石器
PL.39 1．敲石・磨石
2．砥石(1)
PL.40 1．砥石(2)
2．台石

# 第1章　調査の経緯

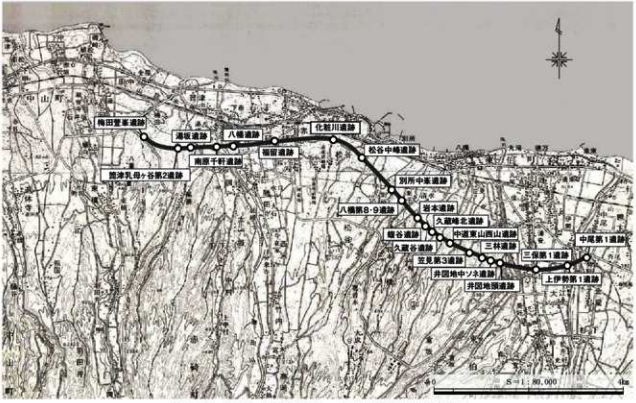
## 第１節　調査に至る経緯

山陰地方を東西に貫く国道９号線は、交通混雑の緩和を図ることに加え、将来の国土幹線道路としての役割を果たすべく、山陰自動車道の整備事業が進められている。こうしたなか鳥取県中部地域では、東伯中山道路、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画され、一部供用開始された区間もある。

このうち東伯中山道路の計画地内には多数の遺跡があり、平成11年度からの地元教育委員会による試掘調査を経て、平成14年度から本格的な発掘調査が行われている。その延べ面積は平成18年度末現在で約215,000㎡となっている(第１図、表１)。

梅田萱峯遺跡２区は平成14年度に赤碕町教育委員会による試掘調査が行われ、弥生時代中期後葉の竪穴住居跡やピットが確認されたほか、弥生土器、石器などが出土した(註１)。また、平成17・18年度には鳥取県埋蔵文化財センターによって広域農道を挟んだ北側尾根・斜面部(１区)と南東丘陵部(３区)の調査も実施され、弥生時代から古代にかけて形成された集落跡が周辺一帯に拡がっていることが明らかとなっている(註２・３)。

当初の計画では琴浦町字光に所在する南原千軒遺跡の調査を行う予定であったが、９月に国土交通省倉吉河川国道事務所から梅田萱峯遺跡への調査変更依頼があり、国土交通省倉吉河川国道事務所と鳥取県教育委員会が遺跡の取り扱いに関する協議を行い、文化財保護法に基づく手続きを経て、鳥取県埋蔵文化財センターが平成18年度発掘調査を行った。調査面積は1,000㎡である。




第１図　東伯中山道路ルートと関係遺跡位置図

**表１　東伯中山道路関係の調査一覧**

| 調査年度 | 遺跡名 | 所在地 | 調査面積 |
|---|---|---|---|
| 平成１４年度 | 井図地頭遺跡 | 東伯郡琴浦町大字三保字下滝峯平ほか | ６，０００㎡ |
| | 井図地中ソネ遺跡 | 東伯郡琴浦町大字田越字井図地中ソネ | １２，０００㎡ |
| | 笠見第３遺跡(Ａ・Ｂ・Ｃ区) | 東伯郡琴浦町大字笠見字東神楽平ほか | １６，２０６㎡ |
| | 笠見３号墳 | 東伯郡琴浦町大字田越字岩屋峯 | |
| 平成１５年度 | 笠見第３遺跡(Ｃ区) | 東伯郡琴浦町大字笠見字東神楽平ほか | ６，９００㎡ |
| | 八橋第８・９遺跡 | 東伯郡琴浦町大字八橋字西二本松 | １１，７３２㎡ |
| | 井図地頭遺跡 | 東伯郡琴浦町大字三保字下滝峯平ほか | ２８８㎡ |
| | 三林遺跡 | 東伯郡琴浦町大字田越字新三林 | ８，４０８㎡ |
| | 久蔵峰北遺跡 | 東伯郡琴浦町大字八橋字龍王頭 | １１，８３１㎡ |
| | 蝮谷遺跡 | 東伯郡琴浦町字蝮谷 | ３，７０５㎡ |
| | 岩本遺跡 | 東伯郡琴浦町字岩本 | ４５８㎡ |
| | 中尾第１遺跡 | 東伯郡琴浦町大字中尾字荒木田ほか | ２８，６９６㎡ |
| | 別所中峯遺跡 | 東伯郡琴浦町大字別所字中峯 | ３，１７５㎡ |
| | 松谷中峰遺跡 | 東伯郡琴浦町大字松谷字中峰 | ７，４７３㎡ |
| 平成１６年度 | 上伊勢第１遺跡 | 東伯郡琴浦町大字上伊勢字東松山 | ７，５２３㎡ |
| | 三保第１遺跡 | 東伯郡琴浦町大字三保字一本木 | １，０７１㎡ |
| | 久蔵谷遺跡 | 東伯郡琴浦町大字笠見字加代坂 | ３，２４５㎡ |
| | 化粧川遺跡 | 東伯郡琴浦町大字赤崎字小谷堤ノ上 | ６，６７２㎡ |
| | 八幡遺跡 | 東伯郡琴浦町大字八幡字八幡ノ後口ほか | １１，９２９㎡ |
| | 南原千軒遺跡(１・２区) | 東伯郡琴浦町大字光字笠本松ほか | ２，９１７㎡ |
| | 中道東山西山遺跡 | 東伯郡琴浦町大字笠見字中道東山上 | １３，２４４㎡ |
| | 福留遺跡 | 東伯郡琴浦町大字赤崎字畑ノ東 | ４，０３０㎡ |
| | 湯坂遺跡 | 東伯郡琴浦町大字湯坂字ヒイガ谷東平 | ４，８９５㎡ |
| 平成１７年度 | 梅田萱峯遺跡(１－Ａ区) | 東伯郡琴浦町大字梅田字萱峯 | ６，３５０㎡ |
| | 笹津乳母ヶ谷第２遺跡(１・２区) | 東伯郡琴浦町大字笹津字赤坂谷平ほか | ４，５００㎡ |
| | 南原千軒遺跡(３区) | 東伯郡琴浦町大字光字大加布毛ほか | １，５００㎡ |
| 平成１８年度 | 梅田萱峯遺跡(１－Ｂ・Ｃ区、２区) | 東伯郡琴浦町大字梅田字萱峯 | ５，４５０㎡ |
| | 笹津乳母ヶ谷第２遺跡(１・２・３区) | 東伯郡琴浦町大字笹津字赤坂谷平ほか | ８，９１４㎡ |
| | 笠見第３遺跡(Ｄ区) | 東伯郡琴浦町大字笠見字東神楽平ほか | １６，６００㎡ |
| | | 計 | ２１５，７１２㎡ |

## 第２節　調査の方法と経過

### （１）調査区の名称と調査方法

梅田萱峯遺跡は琴浦町西端、大山町との境に位置する。遺跡は大山から伸びる丘陵上に立地し、東西を広域農道によって分断されている。この広域農道から北を１区、南を２区、さらに南西方向の浅い谷を挟んだ丘陵地点を３区と呼称する。梅田萱峯遺跡２区は東西の谷に挟まれた狭小な尾根上に立地し、平成17・18年度調査地である１区と同様、調査前の地目は山林となっていた。

第２図　調査地位置図

調査は、まず遺跡を覆う表土を重機により除去し、遺構や遺物包含層などの掘り下げは人力で行った。調査により生じた排土は南側隣接地の尾根部に仮置きした。

調査はグリッド法により行い、基準杭を公共座標第Ⅴ系に基づき10m間隔で設定した。平成17年度同様、基準杭には東西軸にはアルファベットを東から、南北軸には算用数字を北からそれぞれ付し、平成17年度調査地を延長する形でグリッドを設定した。

検出した遺構や遺物は、原則として光波トランシットにより記録した。出土遺物は時期判断が可能なものについては出土位置を記録し、それ以外は遺構またはグリッド毎に一括して取り上げた。写真撮影は35mm判と６×７判フィルムを使用

し、適宜デジタルカメラにより補足した。

**（２）調査の経過**

平成18年９月21日から27日にかけて表土剥ぎを行い、９月26日から10月３日に委託業者による現地での基準点測量及び方眼測量を行った。９月28日、休憩テントの設営や周辺整備を開始し、本格的な遺構検出作業に入った。遺構検出作業は北側から南側に向かって行い、基本層序Ⅱ・Ⅲ層の弥生時代中期後葉の包含層を除去していった。

包含層は比較的薄く北東方向に大型礫が群集し、尾根中心部から南半にかけて平成14年度試掘調査で検出された竪穴住居跡やピットが検出された。また、弥生中期後葉の土器砕片が集中するブロックが調査区全体にわたって確認され、廃棄土坑が点在している状況が明らかとなった。西側の谷部では農道造成のため客土が約１ｍ覆っており、その下部には弥生時代中期後葉の包含層が大きく2層にわたって堆積していた。この谷の北側斜面部では段状遺構を検出している。

そのほか掘立柱建物跡２棟、貯蔵穴２基なども確認され、平成17・18年度調査地である１区と連続した集落であることが明らかとなった。掘り下げ作業を11月28日に終え、翌日調査地の航空写真撮影を実施している。11月31日に発掘資材の撤収、その後補足測量調査を行って12月12日に現地から撤収した。

調査成果は埋蔵文化財センターのホームページで速報的に紹介した。また、東伯中山道路関係の発掘調査について紹介する「発掘調査だより」を作成し、琴浦町内の小中学校に毎月配布したり、琴浦町報に遺跡紹介記事を掲載するなど、地元への普及啓発活動を行った。

発掘調査報告書作成に伴う遺物の整理作業は、埋蔵文化財センター及び調査第一係（東伯調査事務所）で行った。

註１）小泉　傑・石賀　太編2002『鳥取県東伯郡赤碕町　赤碕町内遺跡発掘調査報告書Ⅷ』赤碕町教育委員会
註２）高尾浩司・淺田康行編2007『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書11　梅田萱峯遺跡１』鳥取県埋蔵文化財センター
註３）湯村　功・小口英一郎・濵本利幸編2007『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書16　梅田萱峯遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター

## 調査日誌（抄）

９月21日　重機による表土剥ぎ開始（～27日）
９月26日　基準点測量（業者委託）
９月28日　テント設営、遺構検出作業開始
10月３日　方眼測量・杭打設（業者委託）
10月４日　SK61・SX16検出・掘り下げ開始
10月10日　SK62・SX16土器ブロック調査開始
　　西側谷部包含層掘り下げ開始
10月12日　遺構検出作業終了（Ⅱ層包含層掘り下げ終了）SK65・70・73土器ブロック調査開始、SK64集石掘り下げ開始
10月13日　SI12・13、SK66掘り下げ開始、SS4土器ブロック調査開始
10月17日　SK73完掘
10月19日　SK61完掘
10月31日　SI12完掘
11月１日　SK63掘り下げ開始
11月７日　SK64・65完掘、SK67掘り下げ開始
11月８日　SK62・65完掘、SK68・69掘り下げ開始
11月10日　SS4完掘
11月13日　SK66・SX16完掘、SK71掘り下げ開始
11月15日　SK72掘り下げ開始
11月16日　SB1完掘、SK67・71完掘
11月21日　SK63・70完掘、SI13掘り下げ開始
11月22日　SK67・69・72完掘、SK73掘り下げ開始、谷部包含層掘り下げ
11月24日　SI13、SK63完掘
11月28日　掘り下げ作業終了
11月29日　航空写真撮影（業者委託）
11月30日　テント解体、発掘資材片付け
12月１日　遺構補足測量調査開始
12月４日　調査後地形測量（業者委託）
12月７日　発掘資材撤収
12月12日　遺構測量調査終了

## 第３節 調査体制

下記の体制で発掘調査・報告書作成を行った。

鳥取県埋蔵文化財センター
所　　長　久保穣二朗
次　　長　戸井　　歩（兼総務係長）
総務係
副　主　幹　福田　高之

発掘事業室
室　　長　加藤　隆昭（兼調整係長）
調整係
文化財主事　濵　　隆造
調査第一係
係　　長　湯村　　功
文化財主事　恩田　智則
文化財主事　濵本　利幸
文化財主事　小口英一郎

**表２　新旧遺構名対照表**

| 遺構 | 調査時遺構名 | 報告時遺構名 | 遺構 | 調査時遺構名 | 報告時遺構名 | 遺構 | 調査時遺構名 | 報告時遺構名 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 竪穴住居（建物）跡 | SI1 | SI12 | ピット | P6 | P158 | ピット | P31 | P178 |
| | SI2 | SI13 | | P7 | P159 | | P32 | P179 |
| | SI3 | SI14 | | P8 | P160 | | P33 | P180 |
| 掘立柱建物跡 | | SB1 | | P9 | SB1－P1 | | P34 | P181 |
| | | SB2 | | P10 | SB1－P2 | | P35 | P182 |
| 段状遺構 | SS1 | SS4 | | P11 | P161 | | P36 | P183 |
| 土坑 | SK1 | SK61 | | P12 | P162 | | P37 | P184 |
| | 土器ブロック④・SK2 | SK62 | | P13 | P163 | | P38 | P185 |
| | SK3 | SK63 | | P15 | P164 | | P39 | P186 |
| | SK4 | SK64 | | P16 | P165 | | P40 | P187 |
| | 土器ブロック⑤・SK5 | SK65 | | P17 | SB2－P4 | | P41 | P188 |
| | 土器ブロック①・SK6 | SK66 | | P18 | P166 | | P42 | P189 |
| | SK7 | SK67 | | P19 | SB2－P1 | | P43 | P190 |
| | SK8 | SK68 | | P20 | P167 | | P44 | P191 |
| | SK9 | SK69 | | P21 | P168 | | P45 | P192 |
| | 土器ブロック③・SK10 | SK70 | | P22 | P169 | | P46 | SB2－P3 |
| | SK11 | SK71 | | P23 | P170 | | P47 | P193 |
| | SK12 | SK72 | | P24 | P171 | | P48 | P194 |
| | 土器ブロック②・P1→SK14 | SK73 | | P25 | P172 | | P49 | P195 |
| | SX6・SK15 | SX16 | | P26 | P173 | | P50 | P196 |
| ピット | 土器埋設ピット | P154 | | P27 | P174 | | P51 | P197 |
| | P2 | P155 | | P28 | P175 | | P52 | P198 |
| | P4 | P156 | | P29 | P176 | | | |
| | P5 | P157 | | P30 | P177 | | | |

# 第2章　遺跡の位置と環境



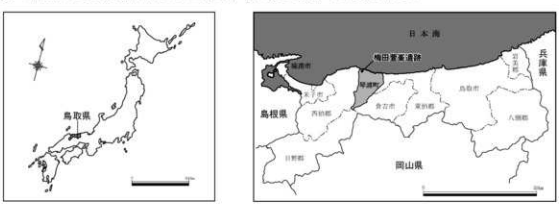
## 第１節　地理的環境

梅田萱峯遺跡が所在する琴浦町は、鳥取県中部地域の西端に位置し、平成16年９月１日に旧東伯町と旧赤碕町が合併して誕生した。県庁所在地の鳥取市からは西に約60km、県西部の商都米子市からは東に約35km離れている。町域は大山山麓から北に向かって広がる三角形状で、東は北栄町、倉吉市と、西は大山町、南は江府町と接し、北は日本海に面する。東西15.2km、南北18.5km、総面積は139.88km$^2$を測る。平成18年12月時点の人口は、20,201人である。

地勢は、大山山麓から派生する急峻な丘陵地が北に向かうほど緩やかとなり、町内を南北に流れる加勢蛇川、洗川、勝田川などの流域に平野部が広がっている。海岸線は単調であるが、良好な漁場となっている。

町の産業は日本海沿岸部と山間部、その中間部にそれぞれ特徴がある。日本海沿岸部は国道９号線沿いを中心に、地酒、地ビール、和牛といった酒造や食品製造などの商工業が盛んである。また海岸部は赤碕港を中心とした沿岸漁場が有名である。中間部は県下有数の生産、販売高を誇る農業が盛んで、二十世紀梨は海外へも輸出されている。山間部は大山滝や南北朝期の動乱を描いた「太平記」の舞台となった船上山、国指定天然記念物の伯耆の大シイなどの風光明媚な自然に囲まれ、多くの観光客が訪れている。

梅田萱峯遺跡は町の北西部、旧赤碕町域に位置する。日本海までは直線距離で約１kmである。大山北麓から派生する丘陵先端付近に立地し、標高は50mから60mを測る。




第３図　遺跡位置図

## 第２節　歴史的環境

ここでは琴浦町内を中心とした遺跡の概要を述べる。

**旧石器・縄文時代**　鳥取県下の旧石器資料は15遺跡で確認されており、位置づけがはっきりしない尖頭器類を含めても40遺跡を数えるに過ぎない。町内では三林遺跡（６）と梅田萱峯遺跡(22)でナイフ形石器の可能性がある資料が、笠見第３遺跡（７）で細石核の可能性がある資料が、本来の位置を遊離した状態で出土している。また水溜、松谷の両地点で槍先形尖頭器が採集されており、住吉第２遺跡(99)では有舌尖頭器が出土している。

縄文時代については、集落像を明らかにしうる調査例は少ない。早期のものとしては、赤坂後口山遺跡(93)、退休寺飛渡り遺跡(101)、上伊勢第１遺跡（２）で押型文土器が検出されている。中期以前では、松ヶ丘遺跡(66)、森藤第１・２遺跡(37)、井図地中ソネ遺跡（５）、井図地頭遺跡（４）などで土

器が出土している。後期段階では森藤第２遺跡と南原千軒遺跡(19)で石囲い炉をもつ竪穴住居跡が検出されている。森藤第２遺跡では、住居内から土器のほか土器片錘、打ち欠き石錘、土偶が出土している。南原千軒遺跡でも遺構外から土偶が出土しており、今朝平タイプの可能性が考えられている。仮にそうであれば、同タイプの日本海側における分布の西限例となりうる。このほか後期から晩期の遺跡として、八重第１遺跡(81)、八重第３遺跡(83)、小松谷遺跡(97)、下甲抜堤遺跡(96)がある。

**弥生時代**　当地域の弥生開始期の様相は明らかではない。前期から中期前半については、近年の低地部の調査でこの時期の集落の一端が見え始めている。上伊勢第１遺跡では前期の竪穴住居跡が３棟確認され、中尾第１遺跡（１）と三保第１遺跡（３）では同時期の配石墓や土壙墓などの墓域が調査されている。これらの遺跡は加勢蛇川を挟んだ沖積平野内の微高地上に近接して存在している。南原千軒遺跡は勝田川沿いの扇状地上に位置し、中期初頭の土器が大量に出土している。また中尾第１遺跡は中期中葉の集落でもある。

中期後半から古墳時代初頭にかけては、丘陵上を舞台として集落が大きく展開する。森藤第１遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡、大峰遺跡(38)、井図地中ソネ遺跡、三保遺跡(49)、笠見第３遺跡、三林遺跡、中道東山西山遺跡（８）、久蔵峰北遺跡(10)、福留遺跡(17)、箆津乳母ヶ谷第２遺跡(21)など枚挙に暇がない。本報告の梅田萱峯遺跡は中期後葉を中心とした遺跡で、未調査の範囲を含めると大規模な集落である可能性がある。住居内から磨製石剣の完存品も出土している。退休寺遺跡(100)も同じ時期で、竪穴住居をはじめ掘立柱建物、土壙墓が確認されている。住居内から分銅形土製品が出土し、柱を抜き取った柱穴内から甕が出土していることから、廃棄時の祭祀的行為が想定されている。多数の住居跡が調査された例から見ると、後期半ばから後半にかけて住居等が激増する様子が窺える。

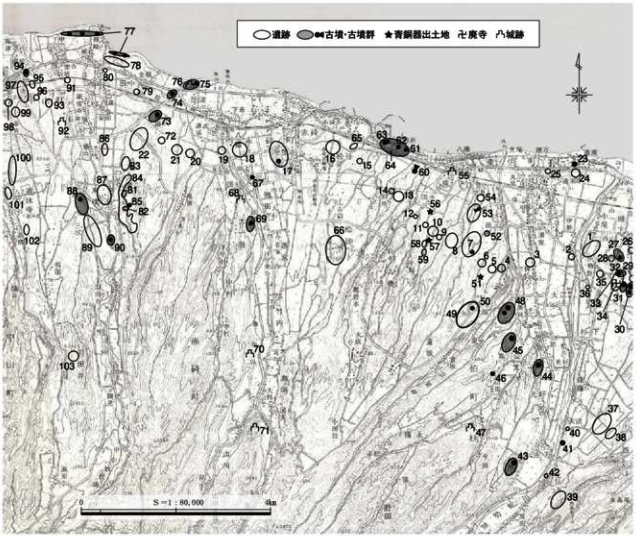
各種生産に関しては、玉作遺跡の調査例が増えている。南原千軒遺跡では中期初頭から後期までの土器を含む溝から施溝分割技法による管玉素材が多数出土している。また軟質な石材を用いて板状素材から施溝分割する「西川津技法」と同様なものがある点も注目される。笠見第３遺跡、久蔵峰北遺跡では後期の玉作工房が検出されている。笠見第３遺跡では後期前半に属する管玉素材のひとつに島根県花仙山産の緑色凝灰岩が使用されていることが判明したほか、管玉の穿孔に鉄針が用いられていたことがわかる例もあった。笠見第３遺跡、久蔵峰北遺跡ともに後期段階では施溝分割は行わず、打撃分割によっている。笠見第３遺跡では赤色顔料が付着した石杵、石皿が多数出土している。

墳墓では墓ノ上遺跡(65)、別所女夫岩峯遺跡(61)で中期の木棺墓が見つかっている。湯坂遺跡(20)では後期の小型の墳丘墓を増築した例があり、山陰地方では珍しい鉄石英製の管玉が副葬されていた。井図地中ソネ遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭の区画溝を伴う土壙墓群が検出されている。

町内では銅鐸、銅矛、銅剣が出土している。八橋(56)では扁平鈕Ⅰ式銅鐸のほか、同一丘陵(57)で銅矛も見つかっている。また田越(51)では円墳の箱式石棺下30cmの位置から中細形銅剣が４本出土している。

**古墳時代**　町内には４基の前方後円墳がある。別所１号墳(笠取塚古墳、53m）(63)、八橋狐塚古墳(町史跡、62m）(60)、大塚古墳(34m)、竜ヶ崎３号墳(21m）(48)で、このうち前期に属すると思われるのは別所１号墳である。

中期から後期にかけては群集墳が築かれる。大高野古墳群(30)、塚本古墳群(31)、斎尾古墳群(32)、公文古墳群(45)、竜ヶ崎古墳群(40)、別所古墳群(64)、箆津古墳群(75)、坂ノ上古墳群(74)、梅田古




1. 中尾第1遺跡、2. 上伊勢第1遺跡、3. 三保第1遺跡、4. 井辺地頃遺跡、5. 井辺地中ソネ遺跡、6. 三林遺跡、7. 笠見第3遺跡、8. 中道家山西山遺跡、9. 久蔵谷遺跡、10. 久蔵峰北遺跡、11. 鎧谷遺跡、12. 岩本遺跡、13. 八橋第8・9遺跡、14. 別所中峯遺跡、15. 松谷中峰遺跡、16. 化粧川遺跡、17. 福留遺跡、18. 八幡遺跡、19. 南原千軒遺跡、20. 湯坂遺跡、21. 笠津乳母ヶ谷第2遺跡、22. 梅田愛峯遺跡、23. 逢束双子塚古墳、24. 逢束遺跡、25. 逢束第2遺跡、26. 横下畜族屋敷跡、27. 横下古墳群、28. 下畜尾2号遺跡、29. 大高野遺跡、30. 大高野古墳群、31. 塚本古墳群、32. 畜尾古墳群、33. 下畜尾1号遺跡、34. 畜尾南寺、35. 伊勢野遺跡、36. 金屋経塚、37. 森藤第1・2遺跡、38. 大峰遺跡、39. 西高尾谷墓遺跡、40. 大法古瓦出土地、41. 大法3号墳、42. 上法万経塚、43. 杉地古墳群、44. 下光針古墳群、45. 公文古墳群、46. 山田1号墳、47. 砂見山城跡、48. 電ヶ峰古墳群、49. 三保遺跡、50. 三保6号墳、51. 田越銅剣出土地、52. 田越第4遺跡、53. 笠見第2遺跡・笠見1号墳、54. 笠見第1遺跡、55. 八橋城跡、56. 八橋銅鐸出土地、57. 久蔵峰銅矛出土地、58. 八橋第2遺跡、59. 八橋第4遺跡、60. 八橋狐塚古墳、61. 別所女夫岩峯遺跡、62. 別所2号墳、63. 別所1号墳（笠取塚古墳）、64. 別所古墳群、65. 墓ノ上遺跡、66. 松ヶ丘遺跡、67. 出上岩屋古墳、68. 横山城跡、69. 丈一坦古墳群、70. 大仏山城跡、71. 山川城跡、72. 梅田所在遺跡、73. 梅田（栄田）古墳群、74. 坂ノ上古墳群、75. 笠津城跡、76. 笠津城跡、77. 御崎古墳群、78. 御崎第1遺跡、79. 田中川上遺跡、80. 御崎第2遺跡、81. 八重第1遺跡、82. 八重第2遺跡、83. 八重第3遺跡、84. 八重第4遺跡、85. 岩屋平ル古墳、86. 横口第1遺跡、87. 横口第2遺跡、88. 三谷古墳群、89. 三谷遺跡、90. 東横古墳群、91. 赤坂大五輪塔、92. 岩井畑城跡、93 赤坂塚口山遺跡、94. 曲松古墳群、95. 林之峯遺跡、96. 下甲抜堀遺跡、97. 小松谷遺跡、98. 住吉第1遺跡、99. 住吉第2遺跡、100. 道休寺遺跡、101. 道休寺飛倉り遺跡、102. 道休寺第1遺跡　103. 羽田井遺跡

**第4図　周辺遺跡分布図**

墳群(73)などである。大高野3号墳では金銅製耳環、青銅製鈴、鉄刀などが副葬されていた。中期後半の高塚古墳は現在は消滅しているが、朝顔形埴輪、形象埴輪などが出土している。後期以降採用される横穴式石室には、大法3号墳(41)、三保6号墳などのように竪穴系横口石室と呼ばれる構造をもつものがある。槻下古墳群(27)、大高野古墳群、塚本古墳群、斎尾古墳群など後続する石室形態もその系譜に連なるものであることから、加勢蛇川流域に石室形態を同じくする集団が存在したことを示している。終末期に属すると思われる切石積石室は山田1号墳(町史跡)（46）、出上岩屋古墳(県史跡)(67)に認められる。

集落の様相は不明な部分が多い。三保遺跡、上伊勢第1遺跡、笠見第3遺跡、蝮谷遺跡(11)、三林遺跡、久蔵峰北遺跡、中尾第1遺跡、三保第1遺跡、松谷中峰遺跡(15)、井辺地中ソネ遺跡、別所中峯遺跡(14)、八重第3遺跡、住吉第2遺跡など集落遺跡の調査例は多いが、実態は必ずしも明らかで

はない。そのような中で注目されるのは笠見第３遺跡と八橋第８・９遺跡(13)である。笠見第３遺跡では今のところ県内最古例となる中期末の鍛冶炉が検出された。鉄床石や羽口など鍛冶関連遺物も出土している。八橋第８・９遺跡では６世紀から７世紀代の竪穴住居跡23棟などが調査されたほか、椀形鍛冶滓なども出土しており、近隣に鍛冶遺構の存在が想定される。

箆津乳母ヶ谷第２遺跡では丘陵斜面を造成した段状遺構が、古墳時代後期から奈良時代にかけて多数築かれている。そのうち１棟は鍛冶炉を伴っていた。

**古代**　町内には山陰地方唯一の国特別史跡である斎尾廃寺(34)がある。金堂や塔、講堂跡が残り、これらを取り囲む土塁状の高まりも存在する。伽藍配置は法隆寺式である。斎尾廃寺が位置する加勢蛇川右岸は伯耆国八橋郡の中心地であったと推定され、近くには出土した炭化米を根拠に正倉または郷倉と考えられる総柱礎石建物群がある大高野遺跡(29)や伊勢野遺跡(35)、水溜り・駕籠据場遺跡といった掘立柱建物群や墨書土器を伴う遺跡がある。やや南には墨書土器や金属器写しの須恵器が出土した森藤第１・第２遺跡、大法古瓦出土地(40)がある。このほか、旧箆津郷に位置する八幡遺跡(18)では掘立柱建物群や赤色塗彩土師器が多数出土している。田中川上遺跡(79)では埋没河川が確認され、その川辺の一部から須恵器や赤色塗彩の土師器が集中して投棄された状態が検出されており、川辺での祭祀行為が想定されている。

墳墓の関係では、笠見第３遺跡と三林遺跡で火葬墓が見つかっている。笠見第３遺跡では土坑を掘り蔵骨器と考えられる土師器坏と火葬骨を木櫃に納めていた。三林遺跡では土坑を掘った中に石槨を設け、その中に土師器を組み合わせた蔵骨器に火葬骨を納めていた。金屋(36)と上法万(42)では経塚が見つかっており、金屋では銅経筒が納められていた。

生産関係では、上伊勢第１遺跡で９世紀から13世紀と考えられる畠跡が見つかり、中道東山西山遺跡では９世紀代に位置づけられる鍛冶炉などの鉄関連遺構や遺物が検出されている。

**中世**　南原千軒遺跡では平安後期の鍛冶関連遺構や遺物が大量に出土した。鍛冶炉や廃棄土坑のほか鉄滓や鍛造剥片などの微細遺物も豊富で、鉄素材から製品まで生産していたと考えられる。

井図地頭遺跡では平安時代末頃の方形区画溝が検出されている。内部には道路状の硬化面や礎石とおぼしき礫があり、居館跡の可能性がある。槻下館跡(町史跡)(26)は40m四方の主郭のほか、周囲に土塁や壕を巡らせた郭をもつ複郭式と考えられる。鎌倉時代に岩野弾正の居城であったと伝えられるが詳細は不明である。

町南部には標高615mの船上山がそびえる。ここには南北朝期に後醍醐天皇が隠岐から逃れた行宮跡(国史跡)がある。赤碕港から船上山にかけては、鎌倉末期と推定される、宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせもつ独特の形態の赤碕塔(県保護文化財)があることでも知られている。

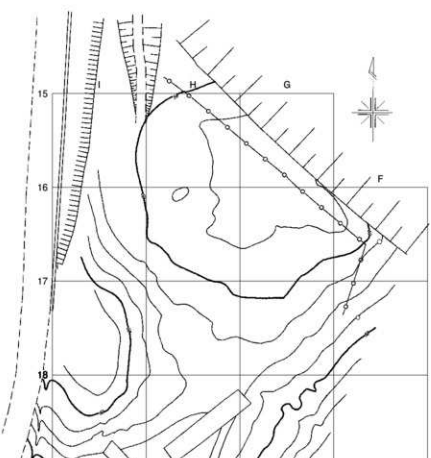
中世城館は町内各地に見られる。南北朝期に西伯耆で勢力をもっていた行松氏が築城し、後に毛利氏が支配し伯耆の経営拠点となった八橋城跡(町史跡)(55)、天正年間の築城と考えられる妙見山城跡(47)、土塁と堀が残る町史跡の箆津城(槇城)跡(76)のほか、條山城跡(68)、大仏山城跡(70)、山川城跡(71)がある。

# 第3章　調査の成果

## 第１節　遺跡の立地と層序

梅田萱峯遺跡が位置する琴浦町は、大山の裾野から延びた台地が海岸近くまで達し、大山より放射状に流下する中小河川によって尾根状に分断されている。遺跡は大山町との町境付近の丘陵上に位置し、調査地からは北方の日本海が一望できる。調査地の西辺は河川の浸食によって急崖となり、崖下は梅田川の支流によって開析されている。北側は広域農道によって平成18年度調査区（１区）と分断され（註１）、東側は浅い谷頭となっており、谷向いに平成17年度調査区（３区）が位置する（註２）。また、西側は広域農道からの進入路により北西側は削平され、南西谷部は最大１ｍの客土によって整地されている（第５図）。

調査地の標高は56～59ｍであり、北がわずかに高く南に向けて傾斜している。これは西から谷が大きく抉入しているためであり、南側の調査区外は再び緩やかに高くなっていく。調査前の地目は１区同様に杉を中心とする植林地であり、表土の形成は未発達であった。表土直下にⅡ層暗褐色土とⅢ層褐色土の包含層が堆積し、Ⅳ層を遺構確認面としている。両層とも少量の縄文土器が認められるものの、その主体は弥生土器であり包含層の形成は弥生時代と想定される。褐色土の土質はソフトロームに極めて似ているが、色調がやや暗い。



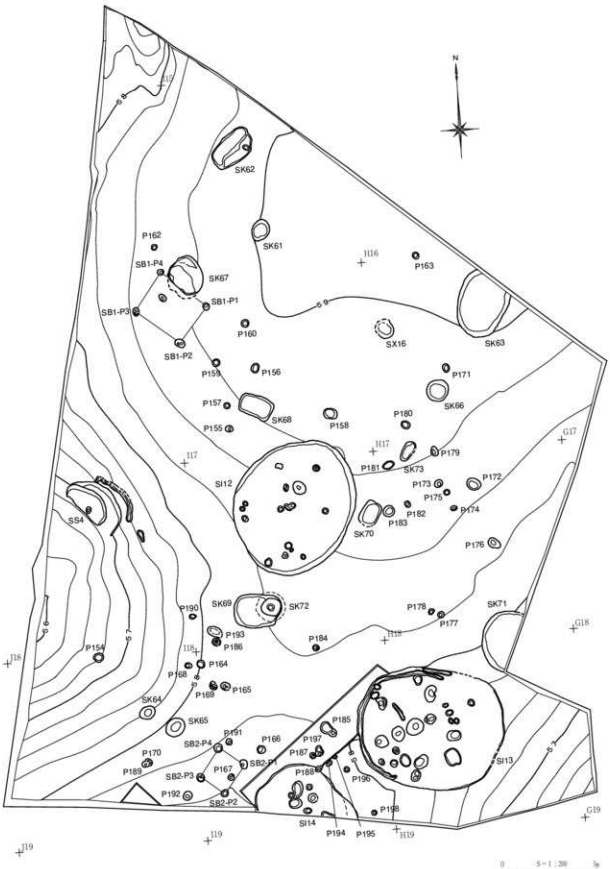

第５図　調査前地形測量図

調査地の基本層序は、表土をⅠ層、遺物包含層をⅡ・Ⅲ層とし、以下無遺物層であるⅣ・Ⅴ層から構成され、Ⅳ層上面を遺構検出面とする（第７図、PL.23）。

Ⅰ層：暗褐色土（表土）。10～15cmの厚さで堆積し、杉などの植林によりしまりが悪い。

西側谷部のみ本層上に客土が堆積する。

Ⅱ層：暗褐色土。調査区全域に10～15cmの厚さで堆積する。径１cm以下の炭化物、焼土粒を多く含む。しまり・粘性ともに弱い。包含される遺物は、


N
SK62
SK61
H16
P163
P162
SB1-P4
SK67
SB1-P1
SB1-P3
P160
SX16
SK63
SB1-P2
P159
P156
P171
P157
SK66
SK68
P158
P180
P155
H17
G17
I17
P179
P181
SK73
SI12
P173
P172
P175
P174
SS4
P182
P183
SK70
P176
SK69
SK72
P178
SK71
P190
P177
G18
P193
P186
P184
H15
I18
P154
H18
P164
P168
P169
P165
SK64
SK65
P185
P191
P166
P197
SB2-P4
P187
P170
SB2-P1
SI13
P189
SB2-P3
P167
P188
P196
P192
SB2-P2
P198
G19
SI14
P194
P195
H19
I19
0　S＝1：200　5m

第６図　遺構配置図

弥生時代中期後葉の遺物が主体となるが、わずかに奈良時代の須恵器が混じる。

Ⅲ層：褐色土。調査区全域に10～30cmの厚さで堆積する。径１～２cm大の炭化物、少量の焼土粒を含む。しまり・粘性ともに強い。包含される遺物は、弥生時代中期後葉の遺物が主体で、わずかに縄文土器が混じる。

Ⅳ層：黄褐色土（ソフトローム）。谷部と尾根部の一部に10～15cmの厚さで堆積する。しまり弱く、粘性強い。無遺物層である。

Ⅴ層：黒褐色土。谷部にのみ堆積する２次堆積土。しまり・粘性ともに強い。無遺物層である。

Ⅵ層：明褐色土。ホーキ層に相当。しまり強い。

Ⅶ層：にぶい黄褐色土（ホワイトローム）。しまり・粘性ともに強い。

Ⅷ層：橙褐色土（ハードローム）。しまり・粘性ともに強い。

註１）高尾浩司・淺田康行編2007『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書11　梅田萱峯遺跡Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター
註２）湯村功・小口英一郎・濱本利幸編2007『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書16　梅田萱峯遺跡Ⅱ』
鳥取県埋蔵文化財センター

## 第２節　調査の成果

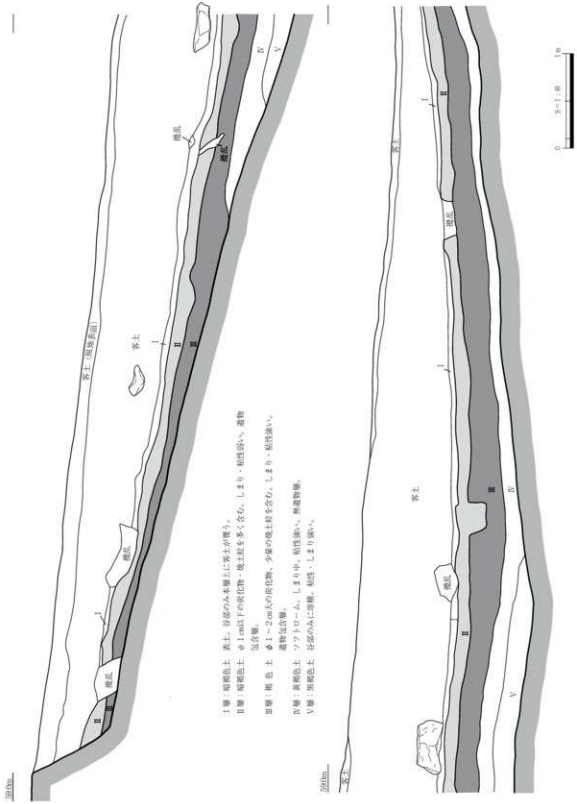
### （１）概要（第６図、写真１・２）

梅田萱峯遺跡２区からは弥生時代中期後葉の竪穴住居（建物）跡３棟、掘立柱建物跡２棟、段状遺構１棟、土器棺墓１基、貯蔵穴２基、土坑10基、ピット43基、６世紀後半から７世紀後半代の製炭土坑１基を検出した。これらの遺構の多くは尾根筋に沿って分布しているが、段状遺構SS4と土器を埋設したP154は西側谷部に面した斜面上に築かれていた。土坑は不整円形を呈した小型のものが主体で、概ね多数の土器が廃棄されている状況であった。土器棺墓SX16は、調査区北東部に位置しており１区南端に見られる墓域の一角を示すものと考えられる。

調査区西側に抉入する谷部では弥生中期後葉の包含層２枚が約40cmの厚さで堆積しており、数多くの遺物が出土している。

写真１　遺構完掘状況

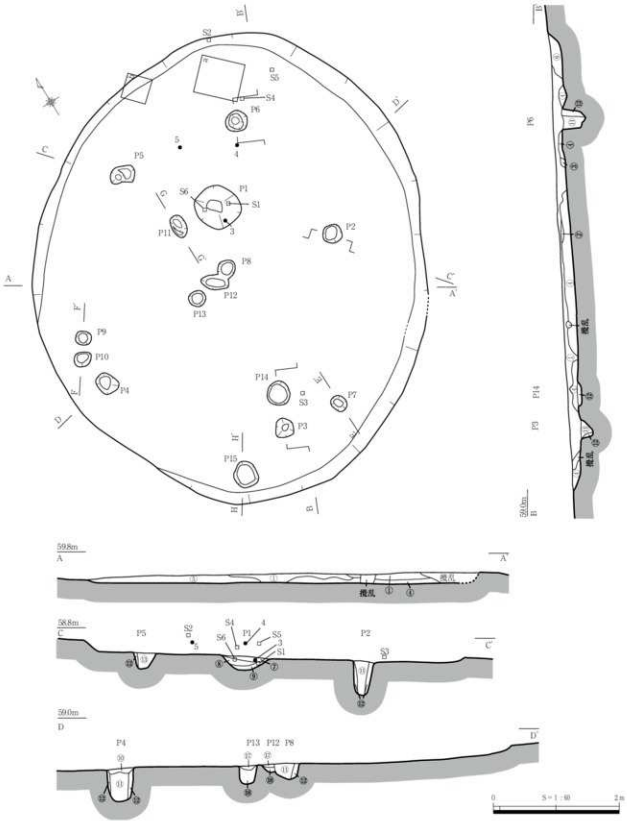
写真２　調査区全景（西から）


I層：褐色土　表土、谷部のみ畑土に客土が乗う。
II層：暗褐色土　φ1mmドロ状化物・焼土粒を多く含む。しまり・粘性弱い、遺物包含層。
III層：明 色 土　φ1～2mmの炭化物、少量の焼土粒を含む。しまり・粘性強い、遺物包含層。
IV層：黄褐色土　ソフトローム。しまりや、粘性強い、無遺物層。
V層：黒褐色土　谷部のみに堆積。粘性・しまり強い。
客土
現表土
畑土
畑底
畑底
畑底

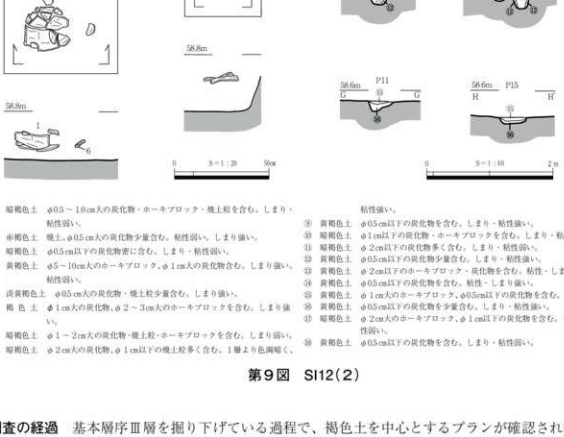
### （2）竪穴住居跡

**SI12（第８・９・10図、表３・４・10、PL. ２・３・38）**

**位　置**　調査区中央部H17グリッド、標高58.25 ～ 58.75mの尾根部平坦面に立地し、南東方向約6.8mにSI13が位置している。




第８図　SI12（１）




① 暗褐色土　φ0.5～1.0cm大の炭化物・ホーキブロック・焼土粒を含む。しまり・粘性弱い。
② 赤褐色土　焼土。φ0.5cm大の炭化物少量含む。粘性弱い。しまり強い。
③ 暗褐色土　φ0.5cm以下の炭化物密に含む。しまり・粘性弱い。
④ 黄褐色土　φ5～10cm大のホーキブロック、φ1cm大の炭化物含む。しまり強い。粘性弱い。
⑤ 淡黄褐色土　φ0.5cm大の炭化物・焼土粒少量含む。しまり強い。
⑥ 褐色土　φ1cm大の炭化物、φ2～3cm大のホーキブロックを含む。しまり強い。
⑦ 暗褐色土　φ1～2cm大の炭化物・焼土粒・ホーキブロックを含む。しまり弱い。
⑧ 暗褐色土　φ2cm大の炭化物、φ1cm以下の焼土粒多く含む。1層より色調暗く、粘性強い。
⑨ 黄褐色土　φ0.5cm以下の炭化物を含む。しまり・粘性強い。
⑩ 暗褐色土　φ1cm以下の炭化物・ホーキブロックを含む。しまり・粘性弱い。
⑪ 暗褐色土　φ2cm以下の炭化物多く含む。しまり・粘性弱い。
⑫ 黄褐色土　φ0.5cm以下の炭化物少量含む。しまり・粘性強い。
⑬ 黄褐色土　φ2cm以下のホーキブロック・炭化物を含む。粘性・しまり弱い。
⑭ 黄褐色土　φ0.5cm以下の炭化物を含む。粘性・しまり強い。
⑮ 黄褐色土　φ1cm大のホーキブロック、φ0.5cm以下の炭化物を含む。しまり強い。
⑯ 黄褐色土　φ0.5cm以下の炭化物を少量含む。しまり・粘性強い。
⑰ 暗褐色土　φ2cm大のホーキブロック、φ1cm以下の炭化物を含む。しまり・粘性弱い。
⑱ 黄褐色土　φ0.5cm以下の炭化物を含む。しまり・粘性弱い。

**第９図　SI12（２）**

**調査の経過**　基本層序Ⅲ層を掘り下げている過程で、褐色土を中心とするプランが確認され精査を実施したところ竪穴住居であることが判明した。

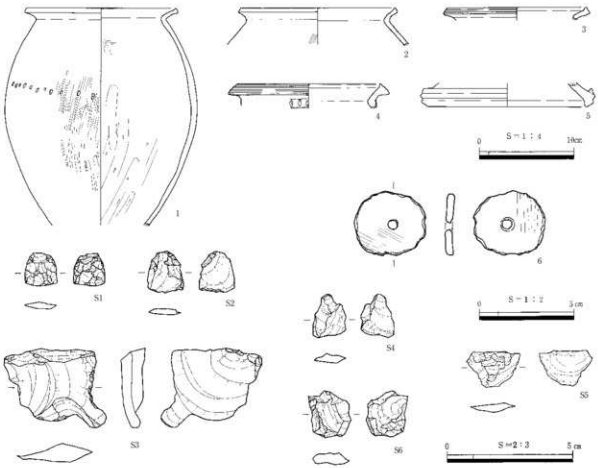
**規模と形態**　平面形は長軸7.3m、短軸6.1mの楕円形を呈し、面積は31.8㎡である。検出面から床面までの深さは５～20cmを測り、北東側壁面は40度の角度で外傾して立ち上がる。床面はⅦ層を削り出して整地されており、壁溝、焼土面は検出されず、貼床は施されていない。

主柱穴はP2(31×30－54cm)、P3(30×29－20cm)、P4(36×28－52cm)、P5(40×24－24cm)の５本柱となる。P2では柱痕が観察でき、その直径は14～18cmである。中央ピットのP1(74×69－22cm)は、床面中心より約１m北側に寄っている。浅い擂り鉢状の掘り方で、埋土は３層に分かれ、中層に炭化物を多く含んでいた。

**埋土と遺物の出土状況**　埋土は概ね暗褐色土とおそらくⅣ層由来の褐色土から構成され６層に分かれる。壁体の崩落土と考えられる６層などから、住居廃絶後の自然堆積と考えられる。遺物は、住居北壁寄りに目立っていたが、緑色凝灰岩の剥片・砕片の多くがP1内から出土している。

**出土遺物**　１～４は甕の口縁部から肩部及び体部下半までの資料である。１は口縁部から体部下半まで残る甕であり、肩部に刺突が認められる。内面はハケ調整後、体部下半までヘラケズリが及んでいる。４はやや拡張した口縁部に３条の凹線を施し、頸部に貼付突帯がめぐっている。５は高坏の脚部であり、脚裾に１条の凹線文が見られる。６は甕体部の破片を転用して造られた紡錘車である。長径3.8cm、短径3.4cm、孔径0.5cm、重さ0.5ｇを測り、周辺部が打ち欠きによって整形されている。

石器はサヌカイト製の石鏃及び未成品２点と管玉製作関連資料を４点図示した。S1は平基式の石鏃であり、表面器体中央に素材面を残し、裏面先端部に両極剥離による潰れが生じている。S2は表裏




**第10図　SI12出土遺物**

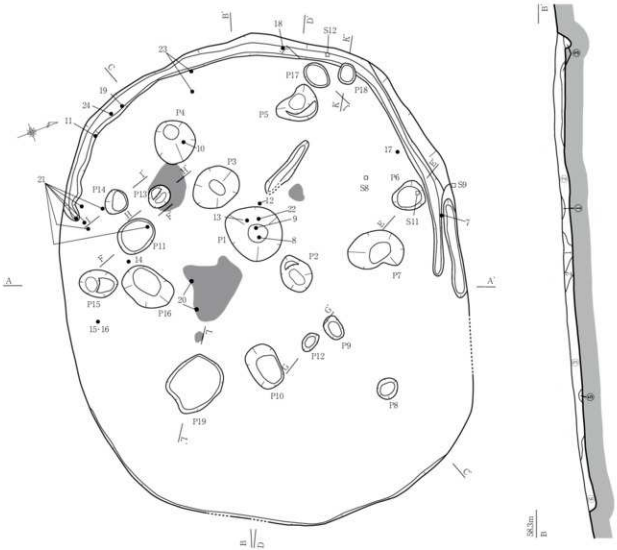
両面に素材面を大きく残し、側縁の加工も一部に留まっていることから石鏃未成品と判断した。S3～6は軟質緑色凝灰岩製の管玉製作に関わる剥片・砕片である。S3は側縁に調整加工を施した剥片であるが、意図的に突出部が作り出されたかは不明である。S4・5・6は管玉製作工程で生じた砕片であり、摺り切り溝や研磨痕は認められない。S5・6は管玉製作でも初期の直方体素材の分割・整形に関わる可能性がある。S6は側縁部に両極打法による階段状剥離や削片が剥がされた面が認められることから、管玉素材を作出する工程で両極剥離が用いられた可能性を示している。これらの資料から、本遺構で管玉製作の初期工程が行われていたものと推定される。

**時　期**　遺構の時期は、出土土器がⅣ－1様式、弥生時代中期後葉に位置づけられる。

**SI13（第11～14図、表３・４・５・11、PL. ３～５・24・38～40）**

**位　置**　調査区南東G・H18グリッド、標高57.5～58.0mの緩斜面上に立地し、北西方向約6.8mにはSI12、南西約2.2mにSI14が位置している。

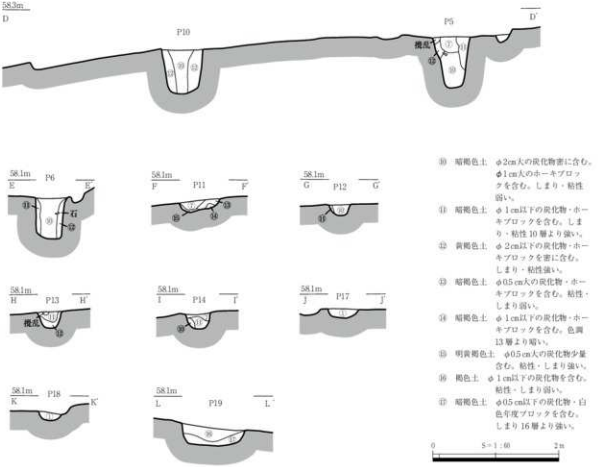
**調査の経過**　基本層序Ⅲ層を掘り下げている過程で、暗褐色土を主体とするプランと弥生時代中期後葉の遺物が集積している状況が明らかとなり、精査を実施したところ竪穴住居跡であることがわかった。




① 黒褐色土　φ１cm大の炭化物・焼土粒、φ２cm大のホーキブロックを含む。しまり弱い。
② 暗褐色土　φ２cm以下の炭化物・焼土粒・ホーキブロックを多く含む。粘性・しまり弱い。
③ 暗褐色土　φ１cm以下の炭化物・焼土粒、φ３～５cm大のホーキブロックを含む。粘性・しまり弱い。
④ 赤褐色土　焼土。粘性弱い。しまり強い。
⑤ 褐 色 土　φ２cm以下の炭化物を含む。しまり・粘性強い。
⑥ 黄褐色土　φ３～５cm大のホーキブロック、φ１cm以下の炭化物を含む。しまり強い。
⑦ 暗褐色土　φ２cm以下の炭化物・ホーキブロック、φ１cm以下の焼土粒を含む。しまり・粘性弱い。
⑧ 黒褐色土　φ３cm以下の炭化物を密に含む。φ0.5cm大の焼土粒、φ２cm以下のソフトロームブロックを含む。粘性・しまり弱い。
⑨ 黒褐色土　φ２cm大の炭化物・ソフトロームブロック・焼土粒を密に含む。粘性強い。

0　5=1:40　2m

**第11図　SI13（１）**




**第12図　SI13（２）**

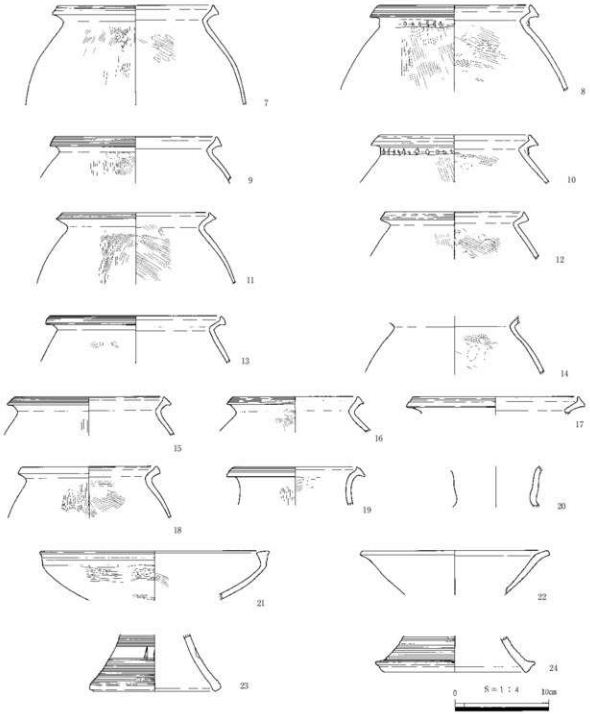
**規模と形態**　平面形は不整楕円形であり、南側の壁は部分的に撹乱が及んでいる。床面は、Ⅵ層ホーキ層を削りだして整地しており、やや斜面部に向かって下がっている。貼床は確認されなかった。長軸7.8m、短軸6.3m、面積は40.3㎡を測る。検出面から床面までの深さは南側で23cm、東側で14cm、壁面は45度の角度で外傾して立ち上がる。

主柱穴は、P4(70×63－79cm)、P5(66×48－80cm)、P7(89×58－66cm)、P10(71×49－69cm)、P16(83×59－52cm)の５本柱となる。P7・10・16の埋土では柱痕が観察でき、直径19 ～ 24cmである。

主柱穴間距離は2.6mを測る。その他、中央ピットの脇に位置するP2(61×49－62cm)、P3(79×64－63cm)とP7の北西方向約40cmに位置するP6(50×45－63cm)は火棚もしくは補助柱穴の可能性が想定される。床面上で検出されたその他のピットは９基と数多いが、いずれも不規則な配置であり明瞭な柱痕は確認されなかった。このなかで、中央ピットP1(94×83－46cm)は不整楕円形を呈し、擂り鉢状の掘り方を有している。埋土は４層に分かれ中層から下層では炭化物を密に含み、土器の小片が数多く出土している。

尾根部寄りの西壁際で幅26cm、深さ13cm、断面U字状の壁溝が廻っている。床面からは地山が被熱した焼土面が４ヶ所認められた。また、中央ピットP1から主柱穴P5に向かって、幅14cm、深さ５cmの溝が延びている。

**埋土と遺物の出土状況**　埋土は６層に分かれ、壁体の崩落土と想定される５層など壁際から流れ込んだ状況を示していることから、住居廃絶後の自然堆積と考えられる。とくに中央ピットであるP1や尾根寄りの２・３層中から土器小片が数多く出土していることから、埋没過程で人為的に廃棄されたも

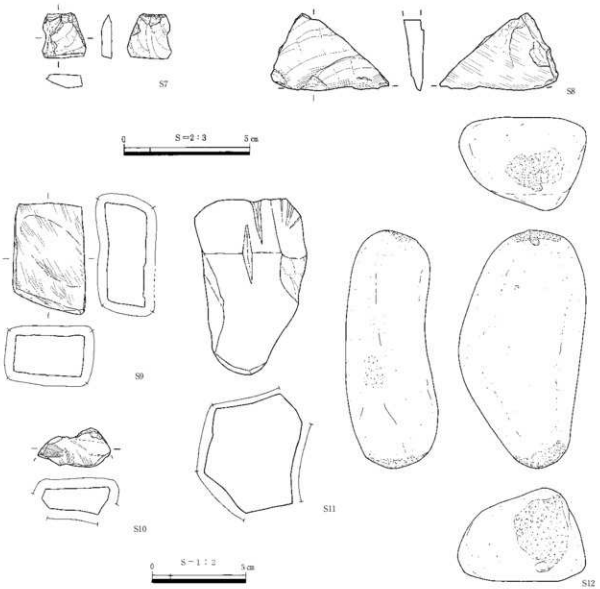



**第13図　SI13出土遺物（１）**

のと考えられる。

**出土遺物**　第13図に土器を図示している。７～18は甕をまとめている。７・９・11～18は甕の口縁～肩部である。口縁部には２～３条の凹線がめぐり、頸部はナデ、肩から体部はハケ調整が施される。

８・10は頸部に貼付突帯がめぐる甕であり、突帯上半は部分的にナデつけている。19・20は壺の口縁部から頸部であり、19は口縁帯に３条の凹線を施している。21～24は高坏の坏部と脚部である。21は口縁直下に２条の凹線をめぐり、体部はミガキ調整である。23は三角形の擬似透孔を持っており、脚裾に10条、裾端部に１条の凹線が認められる。




**第14図　SI13出土遺物（２）**

石器を第14図にまとめている。Ｓ７は板状剥片に両極剥離で加工を施したサヌカイト製の石鏃素材剥片である。S8は石包丁の欠損品であり、表面は素材面を大きく残し、裏面は全体に丁寧な研磨を施している。S9～11は砥石である。S9は６面とも良く使い込まれており、表面の長軸と斜交するように楕円形の窪みが認められる。S10は表裏面とも顕著な擦痕を残す砥石破片であり、側面は面取りされている。残存部位の形状や厚さなどから原形は扁平な板状砥石であったと想定される。S11は細粒花崗岩製の砥石であり、不整形な角礫を素材としている。表面に棒状のものを研磨した溝状の痕跡を残す。S12は横断面が三角形となる棒状の亜角礫を用いた敲石であり、上下両端と左側面に敲打痕が認められる。

**時　期**　遺構の時期は、出土土器がⅣ－１・２様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

**SI14（第15・16図、表３・５・11、PL. ６・23・38）**

**位　置**　調査区南端H18グリッド、標高58.25 ～ 58.75mの尾根平坦面に立地し、北東方向約2.2mにSI13が位置している。

**調査の経過**　Ⅲ層上面で隅丸方形状の小規模な暗褐色土を主体とするプランを検出し、精査を実施した。明確な焼土面や主柱穴が見られなかったことから竪穴建物とした。遺構の一部が調査区外に及んでいるため全体形状は不明である。

**規模と形態**　平面形は現況で長軸４～ 4.5m、短軸4.2mの隅丸方形と考えられ、南東側の壁は部分的に撹乱が及んでいる。床面は、Ⅳ層を削りだして整地しており、貼床は確認されなかった。検出面から床面までの深さは38cm、壁面は50度の角度で外傾して立ち上がる。

主柱穴はP4（30×28－18cm）の１基のみ確認され、その他はいずれも浅い擂鉢形の掘り方を有した性格不明のピットである。そのうちP1（64×48－17cm）は床面のほぼ中心部に位置し、埋土は多くの炭化物や焼土粒が含有している状況であった。また、P1とP3（82×57－20cm）は幅17cm、深さ８cm、断面U字状の溝で連結している。

**埋土と遺物の出土状況**　炭化物・焼土粒を含んだ暗褐色土と褐色土が主要な埋土となる。焼土自体が安定的に堆積しているわけではなく、ブロック状に混入していた。また、３層上面に炭化材が点在していたが、いずれも遺存状態が不良であることなどから部分的な焼失、もしくは小規模なものであったと推測する。遺物は総じて少なく、いずれも埋土中からの出土である。

**出土遺物**　25は口縁部に３条の凹線文を施し、頸部に刻目貼付突帯がめぐっている。体部は内外面ともハケ調整が観察される。26は甕もしくは壺の底部破片であり、表面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整が施されている。

Ｓ13は表面に自然面を残し小型の角礫を素材とした黒曜石製の石核である。打面と作業面を転移しながら両極剥離を行っている。Ｓ14は表面右側縁に連続する加工が施される黒曜石製のスクレイパーである。器体の上半部が欠損しているため全体の形状は不明である。

**時　期**　遺構の時期は、出土土器がⅣ－1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

**（３）段状遺構**

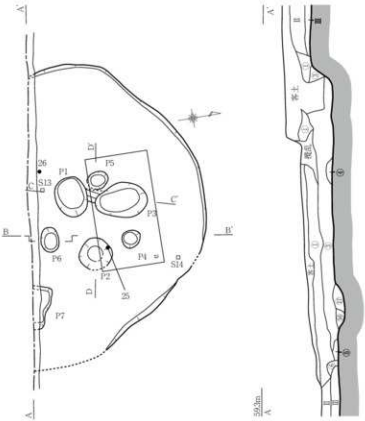
**SS4（第17・18図、表３・５、PL. ７・８・25）**

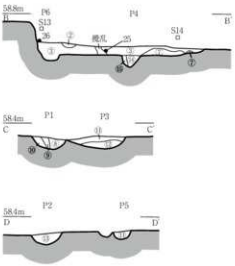
**位　置**　調査区西端中央部I17グリッド、標高56.75 ～ 57.5mの斜面上に立地する。東側約５mにはSI12が位置する。本遺構は、やや位置を違えて建て替えを行っているため、古い方からSS4（a）、SS4（b）と呼称する。

**調査の経過**　谷部包含層Ⅲ層を掘り下げていく過程で土器が多数出土したため、当初土器溜りとして調査に当たったが、中心部にサブトレンチを設定して精査を行ったところ床面が検出されたため、段状遺構と判断した。

**SS4（a）**

**規模と形態**　平面形は長軸3.38m、短軸1.78mの弧状を呈し、外周に幅24cm、深さ６cm、断面U字状の溝が約３mの長さでめぐっている。検出面から床面までの深さは10cm、北東壁は50度の角度で外傾して立ち上がる。溝は北東方向を中心に周回し、北西方向で90度の角度で屈曲して壁際に連結している状況であった。溝の埋土は２層黄褐色土に近似しており、微細な炭化物を含んでいた。

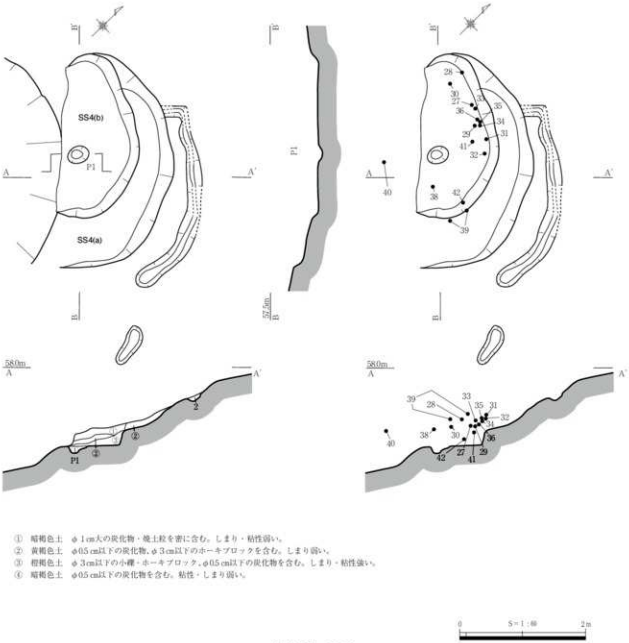



① 暗褐色土　φ２cm以下の炭化物・焼土粒、φ２～３cm大のソフトロームブロックを斑状に含む。粘性・しまり弱い。
② 赤褐色土　φ２～５cm大の焼土ブロック、φ１cm以下の炭化物を密に含む。しまり・粘性弱い。
③ 褐色土　φ２cm以下の炭化物・焼土粒・ホーキブロック・ソフトロームブロックを含む。しまり・粘性弱い。
④ 黒褐色土　φ１cm大の焼土粒、φ５cm大の炭化物を斑状に含む。粘性・しまり弱い。
⑤ 明褐色土　φ１cm以下の炭化物を含む。粘性中、しまり強い。
⑥ 暗褐色土　φ１cm以下の炭化物・ソフトロームブロックを斑状に含む。粘性・しまり弱い。
⑦ 黄褐色土　φ0.5 cm大の炭化物、φ２cm以下のホーキブロックを多く含む。しまり弱い。
⑧ 暗褐色土　φ２cm以下の炭化物・焼土粒を密に含む。しまり・粘性弱い。
⑨ 暗褐色土　φ１cm以下の炭化物・焼土粒を含む。粘性・しまり弱い。
⑩ 暗褐色土　φ１cm以下の炭化物を密に含む。粘性・しまり弱い。
⑪ 褐色土　φ２cm以下の炭化物・焼土粒・小礫を含む。しまり・粘性弱い。
⑫ 黄褐色土　φ１cm以下の炭化物・ホーキブロックを含む。しまり11層より強い。
⑬ 暗褐色土　φ１cm大の炭化物・焼土粒を多く含む。粘性・しまり弱い。
⑭ 暗褐色土　φ0.5 cm以下の炭化物を含む。しまり弱い。
⑮ 褐色土　φ１cm以下の炭化物少量含む。しまり14層より強い。
⑯ 暗褐色土　φ１cm大の炭化物・ホーキブロック、φ１cm以下の焼土粒含む。粘性・しまり弱い。
⑰ 黄褐色土　φ0.5 cm以下の炭化物含む。粘性・しまり強い。

**第15図　SI14**

**第16図　SI14出土遺物**




**第17図　SS4**

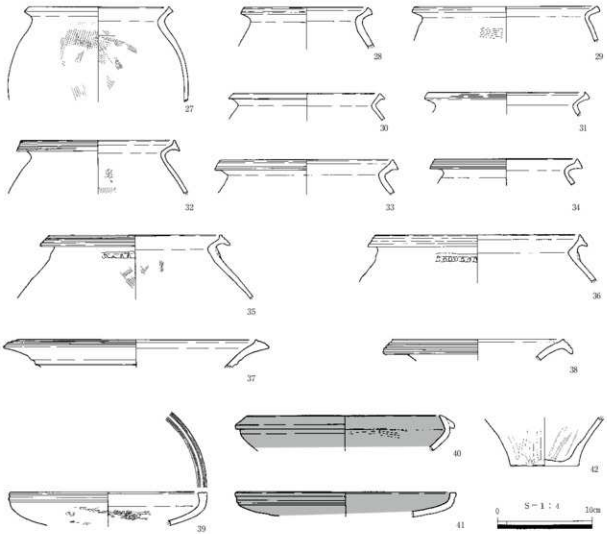
**埋土と遺物の出土状況**　埋土は地山に近い黄褐色土が覆っている。床面からはピット、壁溝、貼床、焼土面など確認されなかった。

**SS4(b)**

**規模と形態**　SS4(a)よりも北西方向に50～70cmほど移動し、縮小して建て替えを行っている。平面形は長軸2.6m、短軸1.2mの弧状を呈し、面積は1.99㎡を測る。検出面から床面までの深さは28cm、北東壁は70度の角度で外傾して立ち上がる。床面はⅧ層を削り出して整地されており、中央やや南寄りにP1(34×25－12cm)を検出した。

**埋土と遺物の出土状況**　埋土は３層に分かれ、斜面上方から流れ込んだ状況を示していることから、自然堆積と考えられる。とくに１層中から土器などが数多く出土していることから、廃絶後の埋土堆積過程で人為的に廃棄されたものと考えられる。土器は完形となるものはなく、いずれも破砕したものを投棄している状況であった。

**出土遺物**　27～36は甕をまとめている。幅狭な口縁帯を持ち、２条前後の凹線が施される27～31と




**第18図　SS4出土遺物**

やや拡張した口縁外面に３条の凹線文がめぐる32 ～ 36の二者が認められる。このうち35・36は頸部に刻目突帯を施し、上半部をナデ消している。37・38は壺の口縁部であり、37は端部に３条の凹線文と頸部に１条の突帯がめぐっている。39 ～ 41は高坏の坏部である。39は口縁端部に１条の凹線文、口縁直下に２条の凹線を施す。40は「く」の字状に屈曲する体部に口縁帯が張り出している。内外面赤色塗彩がなされている。41は皿状の坏部をもつ内外面赤色塗彩がなされている高坏である。

**時　期**　遺構の時期は、出土土器がⅣ－１～２様式に比定されることから、弥生時代中期後葉に位置づけられる。